

唐代の「折楊柳」

——「折柳寄遠」から「折柳贈別」へ——

佐藤 大志

はじめに

李白「春夜洛城聞笛」(卷一八四)¹

誰家玉笛暗飛聲 誰が家の玉笛ぞ 暗に声を飛ばす

散入春風滿洛城 散じて春風に入り 洛城に満つ

此夜曲中聞折柳 此の夜 曲中に折柳を聞く

何人不起故園情 何人か故園の情を起こさざらん

右は国語教科書の教材としても知られる李白の「春夜洛城に笛を聞く」である。この詩の第三句に望郷の思いを引き起こす曲として登場する「折柳」すなわち「折楊柳」については、その背景として送別の場において楊柳の枝を折って旅立つ人物に贈る「折柳贈別」の習俗があったと説明される。

例えば、漢詩漢文解釈講座第2巻『漢詩Ⅱ(唐詩・上)』(昌平社・一九九五)は、「聞折柳」の語釈に次のように言う。

当時、送別の際に柳の枝を折って旅立つ人に贈った習俗があり、その「祖餞」(いわば送別宴)の場で笛曲として演奏されることが多かったので、この曲を耳にすると「離別」「郷愁」などが想起された。(三四三頁)

また研究資料漢文学4『詩Ⅱ』(明治書院・一九九四)には、

(別れの曲である)「折楊柳」の調べを聞いた。「折柳」は、別離の情を歌う笛の曲「折楊柳」。古くからの楽府題で、その題名は、旅立つ人を見送るとき、楊柳(柳と留が同じ音であることから、旅立つ人を留める、という気持ち)を託した)の枝を環(環と還が同じ音であることから、無事の帰還を祈る気持ち)を込めた)にして贈った風習に発する。当時、都長安を旅立つ人を見送るときは、郊外の霸橋(はまう)まで共にゆき、見送ったという。(二十六頁)

と、その理由も含めて、送別の時に楊柳の枝を贈る習俗があったと

説明する。この「折柳贈別」の習俗は、王之渙「涼州詞」や王維「送元二使安西」の解説においても言及されることが多く、唐代の一般的な習俗として広く知られている常識の一つであろう。

しかし、稿者の調査に拠れば、盛唐以前の詩において、この「折柳贈別」の習俗を、詩中に明確に詠み込む詩は見当たらず、「折柳贈別」が顕著に現れ始め、詩のモチーフとして定着するのは中晚唐以降と考えられる。

稿者は、前稿において、『楽府詩集』巻二二・横吹曲辞二所収の「折楊柳」の作例を中心として、梁陳以前の「折楊柳」について考察を加えた。その結果、梁陳の「折楊柳」は、男性が望郷の思いを込めて楊柳を「攀折」する「折柳望郷」と、女性が遠離別の男性を思つて楊柳を「攀折」する「折柳寄遠」の二つの系統があるものの、「折柳贈別」は、梁陳以前の詩には見出せないことを指摘した。本稿では、この前稿の結論を踏まえ、唐代における「折楊柳」の展開を明らかにしつつ、「折柳贈別」が送別詩のモチーフとして定着するまでの過程をたどつてみたい。

一 初唐期の「折楊柳」

『楽府詩集』横吹曲辞二所載の「折楊柳」では、六朝末の江総に続いて、初唐期の作例として盧照鄰の「折楊柳」を挙げる。

盧照鄰「折楊柳」（卷四二）

倡樓啓曙扉 倡樓 曙扉を啓くに

楊柳正依依	楊柳 正に依依たり
鶯啼知歲隔	鶯啼きて 歳の隔たるを知り
條變識春歸	条變じて 春の帰るを識る
露葉凝愁黛	露葉 秋黛を凝らすごとく
風花亂舞衣	風花 舞衣を乱すがごとし
攀折聊將寄	攀折 聊か將て寄せんとするも
軍中音信稀	軍中 音信 稀なり

盧照鄰の「折楊柳」は、遠く離れた辺境の兵士を思う妓女の心情を詠む。「依依」たる楊柳は、男性が故郷を出発する時の春の情景を詠んだ『詩経』小雅「采薇」の「昔我往矣、楊柳依依たり」（昔我往矣、楊柳依依）に基づくものであり、別離の時を象徴する景物として、六朝詩にもしばしば用いられるモチーフである。

初唐期の詩では、例えば、劉希夷「采桑」（卷八二）に「楊柳行人を送り、青青 西のかた秦に入る。誰が家の采桑の女ぞ、楼上春に勝えず」（楊柳送行人、青青西入秦。誰家采桑女、楼上不勝春）とあり、旅立つ人を見送る楊柳を見て、離別した男性を思い出し、その帰還を願う採桑の女性を詠む。また陳子昂「送客」（卷八四）に「故人 洞庭より去り、楊柳 春風に生ず。相送る 河洲の晩、蒼茫 別思盈つ」（故人洞庭去、楊柳春風生。相送河洲晚、蒼茫別思盈）とあり、洞庭湖を去る客を見送る時の景物として、春風に吹かれる楊柳の姿を描く。

初唐期の詩における「楊柳」は、離別の時を象徴する春の景物として描かれており、「折柳贈別」の習俗を暗示する詩は見当たらない。

い。盧照鄰の「折楊柳」においても、女性が楊柳を「攀折」するのは、遠離別の男性に楊柳の枝を送るためであり、この詩は梁陳の「折柳寄遠」の系譜に位置づけられる詩である。

この盧照鄰の「折楊柳」のように、初唐期の「折楊柳」の多くは、遠離別の男性を思う女性の「折柳寄遠」を主題とする。『樂府詩集』横吹曲辞二に収められる初唐期の「折楊柳」では、沈佺期（『全唐詩』は一に宋之間の詩に作ると注す）、劉憲、崔湜らの「折楊柳」も閨怨の女性の「折柳寄遠」を詠んでおり、それは次の韋承慶「折楊柳」も同じである。

韋承慶「折楊柳」（卷四六）

萬里邊城地 萬里 辺城の地

三春楊柳節 三春 楊柳の節

葉似鏡中眉 葉は鏡中の眉に似

花如關外雪 花は関外の雪の如し

征人遠鄉思 征人 遠郷の思い

倡婦高樓別 倡婦 高樓の別れ

不忍擲年華 年華を擲つに忍びず

含情寄攀折 情を含みて攀折を寄す

冒頭に「萬里邊城地」とあるように、この詩は兵士がいる辺境の地から始まり、第三・四句は柳の葉を鏡に映る女性の眉に、花（柳絮）を辺境に降る雪に見立てる。続く第五・六句が、遠く故郷を思う「征人」と、高樓で男性との別離を思う「倡婦」を対比的に描く

ところから推せば、第三・四句も男性と女性が、それぞれ春の楊柳の姿に、遠く離別する相手の姿や彼の地の景物を重ね合わせて見ていることを表現したものであろう。そして結びの二句では、春の時光を無為に過ごすことに耐えられず、遠く離別する相手を思つて楊柳を手折つて送ろうとすることを詠む。閨怨の女性の「折柳寄遠」と、男性の望郷の思いを詠む「折柳望郷」を重ね合わせつつ、遠く離別した人に楊柳を送ることを以て、この詩は結ばれている。⁴

以上のように、初唐期の樂府題「折楊柳」は、いずれも閨怨の女性の「折柳寄遠」を主題とする。その一方、樂府題「折楊柳」以外の詩では、「折楊柳」という曲が、辺境由来の笛曲であり、また辺境の兵士の望郷の思いをかき立てる曲として見える。例えば、駱賓王「從軍中行路難二首」其一（卷七七）に「且に清笳楊柳の曲を悦ばんとするに、詎ぞ芳園桃李の人を憶はん」（且悦清笳楊柳曲、詎憶芳園桃李人）とあり、また張説「送趙二尚書彦昭北伐」（卷八八）に「梅花は別れの引を吹き、楊柳は帰る詩を賦す」（梅花吹別引、楊柳賦歸詩）とある。両者ともに横吹曲の「折楊柳」が北朝由来の曲であることを踏まえ、前者は天子の恩に報いんとする兵士は、筋で演奏される楊柳の曲を聞いても、故郷で待つ美しい人を思い出すこともないと言ひ、後者は同じく北朝由来の「梅花落」と並列し、「梅花落」が別離の曲であるのに対して、「折楊柳」は思婦の詩であると言ふ。

このように見えてくると、初唐期の「折楊柳」は、遠離別の男性を思う女性の「折柳寄遠」と、故郷を思う男性の「折柳望郷」の二つの「折楊柳」があり、樂府題「折楊柳」は、女性の「折柳寄遠」を

主題とし、男性の「折柳望郷」は「折楊柳」の曲を聴くことよって引き起こされるものというように、ある程度の区別がなされているように見える。

そして、送別の場で楊柳を贈る「折柳贈別」は、初唐期の詩には見出すことができません。また送別の場における折柳を詠む詩も、初唐期の詩には見出せない。初唐期の詩において、「楊柳」は送別の場を想起させる景物として、しばしば用いられるが、「折楊柳」は送別の場を想起させるものではなく、むしろ遠別離を表象するものだったようである。

二 盛唐期の「折楊柳」

『樂府詩集』横吹曲辭二の「折楊柳」には、盛唐期の詩人の「折楊柳」として、張九齡、徐延寿⁶、李白の詩を収録する。彼らの「折楊柳」は、いずれも閨怨の女性の「折柳寄遠」である。

李白「折楊柳」（卷一六五）

垂楊拂綠水	垂楊	綠水を払ひ
搖豔東風年	揺艶 ^{ようえん}	たり 東風の年
花明玉關雪	花は明らかなること	玉関の雪のごとく
葉暖金窗烟	葉は暖らかなること	金窓の烟のごとし
美人結長想	美人	長想を結び
對此心淒然	此に對して	心淒然たり
攀條折春色	條を攀りて	春色を折り

遠寄龍庭前 遠く寄す 龍庭の前

前半は春風に吹かれる春の楊柳の姿を描き、後半はその春の楊柳を見て辺境に出征した男性に楊柳を送ろうとする女性を描く。柳の花を辺境の雪に喩えることは、先の韋承慶「折楊柳」にも見えた表現であり、この詩は、梁陳の「折楊柳」から初唐の「折楊柳」へと継承された「折柳寄遠」の系譜に位置づけられる作品である。

この李白「折楊柳」と同じように、張九齡と徐延寿の「折楊柳」も閨怨の女性の「折柳寄遠」を詠む。張九齡は故園の春が無為に過ぎてゆくことを嘆き、辺境で苦勞する出征の兵士の身を案じる女性の思いを詠み、徐延寿は長安の大道を扶む春の楊柳の姿を男性と共有できないことを嘆く女性の思いを描く。

以上のように、盛唐期の樂府題「折楊柳」の作例は、いずれも「折柳寄遠」を詠んでおり、樂府題「折楊柳」は、女性の「折柳寄遠」を主題とするということが、当時の詩人たちには共有されていたようである。

一方、詩中に見える「折楊柳」の曲は、やはり遠く故郷を離れた男性の望郷の思いを駆り立てる曲として見え、李白「春夜洛城聞笛」や王之渙「涼州詞二首」其一以外では、王翰「涼州詩二首」其二などが、その例として挙げられる。

王翰「涼州詞二首」其二（卷一五六）	
秦中花鳥已應闌	秦中の花鳥 已に応に闌なるべし
塞外風沙猶自寒	塞外の風沙 猶ほ自ら寒し

夜聽胡笳折楊柳 夜に聴く 胡笳 折楊柳
教人意氣憶長安 人をして 意氣 長安を憶はしむ

王翰「涼州詞二首」の第一首は國語の教科書教材としても知られる詩であり、これはその第二首である。前半二句は春爛漫であらう閑中といまだ寒さの残る辺境の地の春が比較され、後半二句は夜に胡笳によって吹かれる「折楊柳」の曲を聴けば、辺境で従軍する人々は、長安を思い起こすのだと言う。

この他にも、李白「塞下曲六首」其一（卷一六四）においても、「五月 天山の雪、花無く祇だ寒さ有るのみ。笛中に折柳を聞くも、春色 未だ曾て看ず」（五月天山雪、無花祇有寒。笛中間折柳、春色未曾看）とあり、笛曲の「折柳」は春を想起させる曲であるのに、辺境には五月になっても春が訪れないことを言う。王之渙「涼州詞二首」其一（卷二五三）にも「羌笛 何ぞ須ひん 楊柳を怨むを、春光 度らず 玉門関」（羌笛何須怨楊柳、春光不度玉門関）とあるように、「折楊柳」の曲は春——特に辺境の兵士にとっては閑中（長安）の春——を想起させる曲として、当時の詩人たちには意識されていたようである。

また初唐期と同じように、盛唐詩にも別離の景物としての「楊柳」を詠む詩は多い。例えば、王維「観別者」は、老いた親を養うために燕趙へと旅立とうとする息子が家族や友人と別れる姿に、久しく家族と別れて暮らす我が身を重ね合わせた詩であり、冒頭に別離の景物として「青青」と茂る楊柳の姿が描かれている。

王維「観別者」(卷二二五)
青青楊柳陌 青青たり 楊柳の陌
陌上別離人 陌上 別離の人
愛子游燕趙 愛子 燕趙に遊ぶに
高堂有老親 高堂に老親有り
不行無可養 行かざれば 養ふべき無く
行去百憂新 行き去るも 百憂 新なり

この他、友人との別離を惜しむ送別の詩にも、楊柳は別離の景物としてしばしば見え、更には別離の思いと楊柳の姿とを重ね合わせる詩もある。例えば、劉長卿「夏口送徐郎中帰朝」(卷一四八)は、長安へと帰る人物との別離を惜しむ思いを「離心と楊柳と、水に臨みて更に依依たり」(離心與楊柳、臨水更依依)と言い、李白「下途帰石門旧居」(卷一八一)は、友と別れて遠く旅立つ思いを、「別れを懐みて心の苦しみ易きを知らんと欲せば、向暮 春風 楊柳の糸」(欲知悵別心易苦、向暮春風楊柳絲)と言う。別れ難い思いを、前者は「依依」たる楊柳の枝と重ね合わせ、後者は夕暮れに春風に吹かれる楊柳の枝と重ね合わせる。他にも、高適の「送田少府貶蒼梧」(卷二二三)では、南方に左遷される友人を励まして、「江山到處堪乘興、楊柳青青那足悲」と言う。

ただし、盛唐期の詩には、送別の場における「折柳贈別」の作例とも解釈できそうな詩も見える。

王之渙「送別」(卷二二三)

楊柳東風樹 楊柳 東風の樹

青青夾御河 青青 御河を夾む

近來攀折苦 近來 攀折に苦しむは

應為別離多 応に別離の多きが為なるべし

前二句は春風に吹かれ、青青と茂る楊柳が運河の兩岸に立ち並び、別離を想起させる景物が描かれる。そして、後二句はその楊柳が、近頃攀折に悩まされているのは、別離が多いことがその原因であると言う。これは、楊柳を攀折する人物が明らかにされておらず、楊柳の攀折が送別の場面における「折柳贈別」を暗示するとも解釈しうる。しかし盛唐期以前の詩では、楊柳の「攀折」は閨怨の女性の「折柳寄遠」の行為とされ、また後述するように、中唐期の「折楊柳」においても、楊柳の枝がしばしば攀折されるのは、女性の「折柳寄遠」の結果であるとする作例が多いことから、これも「折柳寄遠」の結果と考えるのが自然であろう。

また次の岑参「送楊子」では、別れに臨んで馬の鞭を贈ることを行い、この馬の鞭は楊柳の枝を指すようである。

岑参「送楊子」(卷二〇〇)

斗酒渭城邊 斗酒 渭城の辺

壚頭耐醉眠 壚頭 酔ひて眠るに耐ふ

梨花千樹雪 梨花 千樹の雪

楊葉萬條煙 楊葉 万条の煙

惜別添壺酒 別れを惜しんで 壺酒を傾け

臨歧贈馬鞭、 岐に臨んで 馬鞭を贈る、

看君頰上去 君が頰上に去るを見る

新月到家園 新月 家に到らば円かならん

第六句の「贈馬鞭」について、廖立氏は別離に臨んで楊柳の枝を折って贈ったのであり、本物の馬の鞭ではないと注し、『三輔黃圖』の「灞橋折柳贈別」の記事を引用する¹⁰。梁鼓角横吹曲の「折楊柳歌辞五曲」其一(『樂府詩集』卷二五)に「馬上上りて 鞭を捉らず、反て折る 楊柳の枝」(上馬不捉鞭、反折楊柳枝)とあり、馬の鞭として楊柳の枝を贈ったとする解釈は、これに基づくと考えられる。もし、これが楊柳の枝を「馬鞭」に見立てたものであれば、この詩は送別の場で楊柳の枝を贈る早い時期の作例と言える。

しかし、盛唐期の詩には、この作品のように「折柳贈別」のモチーフを明確に詠み込む詩は、管見の及ぶ限り、他に例が見当たらない。また、試みに岑参と李白の送別詩において、送別の場面で旅立つ人物に花樹を贈る例を調べると、岑参には、「天山雪歌送蕭治帰京」(卷一九九)に「雪中何以贈君別、惟有青青松樹枝」、「送張秘書充劉相公通汴河判官使赴江外觀省」(卷一九八)に「臨岐欲有贈、持以握中蘭」、李白には、「秋山寄衛尉張卿及王徵君」(卷一七二)に「何以折相贈、白花青桂枝」とあり、送別の場で旅立つ人物に花樹(の枝)を贈ることは、楊柳以外にも行われていたようである。

岑参「送楊子」において、楊柳を馬鞭として贈った理由は、梁鼓角横吹曲の「折楊柳歌辞五首」其二(『樂府詩集』卷二五)に「腹

中 愁ひて楽しまず、郎が馬鞭と作らんことを願ふ。出入には郎が臂に撰がれ、蹀座には郎が膝の辺」（腹中愁不樂、願作郎馬鞭。出入撰郎臂、蹀座郎膝邊）とあるのを踏まえれば、いつまでも相手と一緒にいたいと願う惜別の情を伝える為ではないだろうか。

岑参のこの句が、当時の送別の場における「折柳贈別」における習俗に基づくものか、それとも梁鼓角横吹曲の「折楊柳歌辞」を踏まえた機智的表現なのかは分からないが、盛唐期の「折楊柳」や楊柳を詠む詩から判断すれば、少なくとも送別の場での「折柳贈別」は、詩の世界ではいまだ定着してはいなかったようである。

三 中唐期の「折楊柳」

『楽府詩集』横吹曲辞二には、中唐期の詩人の「折楊柳」の作例として、孟郊（二首）、張祜、李端の作例を載せる。この中、孟郊と張祜の「折楊柳」は、いずれも遠離別の男性を思う女性の「折柳寄遠」を詠む。

孟郊「折楊柳二首」（卷三七三）其一
楊柳多短枝 楊柳 短枝多
短枝多別離 短枝 別離多
贈遠屢攀折 遠きに贈らんと屢ば攀折せば
柔條安得垂 柔条 安んぞ垂るるを得ん
青春有定節 青春には定節有るも
離別無定時 離別には定時無し

但恐人別促 但だ人の別れの促るを恐れ
不怨來遲遲 來たることの遅遅たるを怨まず
莫言短枝條 言ふ莫かれ 短き枝条と
中有長相思 中に長相思有り
朱顔與綠楊 朱顔と綠楊と
併在別離期 併びに別離の期に在り

孟郊「折楊柳二首」の第一首は、楊柳の枝には短い枝が多く、短い枝は別離が多いからであると言ひ、それは遠く離別する人に贈るうとして、しばしば攀折されるからであると説明する。先の王之渙「送別」では、楊柳が攀折に苦しむのは別離が多いからと言うのみであったが、ここでは攀折の理由が遠別離にあると説明されている。

また孟郊の第二首も、従来の「折楊柳」の表現を踏まえつつ、遠く辺境の守備に従事する男性を思う女性を詠む。

孟郊「折楊柳二首」其二
樓上春風過 樓上 春風 過ぎ
風前楊柳歌 風前 楊柳の歌
枝疏緣別苦 枝の疏なるは 別れの苦しみに縁り
曲怨爲年多 曲の怨むは 年の多きが為なり
花驚燕地雲 花は驚く 燕地の雲
葉映楚池波 葉は映ず 楚池の波
誰堪別離此 誰か堪えん 此に別離するを

征戌在交河 征戌 交河に在り

結びの句に「誰堪別離此、征戌在交河」とあるように、この詩は辺境で従軍する男性を思う女性の「折柳寄遠」を主題とする。第三・四句に「枝疏縁別苦、曲怨為年多」とあるように、楊柳の枝がまばらなのは別離の苦しみのためであり、さらに「折楊柳」の曲には別離の時間が長いことの怨みが込められていると言う。

この孟郊の二首と同じように、張祜の「折楊柳」も愛する人をもって攀折を重ねる女性を詠み、楽府題「折楊柳」が、女性の「折柳寄遠」を主題とすることは、中唐期にも継承されているようである。

しかし、大曆十才子の一人である李端の「折楊柳」は、旅立つ友人を見送る送別の場面を詠み、孟郊や張祜の「折楊柳」とは趣を異にする。

李端「折楊柳」(巻二八四)

東城攀柳葉	東城	柳葉を攀る
柳葉低着草	柳葉	低れて草に着く
少壯莫輕年	少壯	年を軽んずる莫かれ
輕年有衰老	年を軽んずれば	衰老する有り
柳發遍川岡	柳は発きて	川岡を遍くし
登高堪斷腸	高きに登りて	斷腸に堪ふ
雨煙輕漠漠	雨煙	軽くして漠漠たり
何樹近君郷	何れの樹か	君が郷に近からん

贈君折楊柳 君に贈る 折楊柳

顏色豈能久 顏色 豈に能く久しからん

上客莫沾巾 上客は巾を沾す莫きも

佳人正回首 佳人は正に首を回らさん

新柳送君行 新柳は君が行くを送り

古柳傷君情 古柳は君が情を傷む

突兀臨荒渡 突兀 荒渡に臨み

婆娑出舊營 婆娑 旧營に出づ

隋家兩岸盡 隋家 兩岸 尽くし

陶宅五株榮 陶宅 五株 榮ゆ

日暮偏愁望 日暮れて偏へに愁望すれば

春山有鳥聲 春山に鳥声有り

冒頭の「東城」は長安の東城を指し、この詩は長安から旅立つ友人を見送る時の思いを詠む。この詩は、『全唐詩』の題下注には「一に折楊柳送別に作る」とあり、送別の場面で詠まれた送別詩であった可能性もある。

冒頭四句は楊柳の葉(枝)を攀ることから始まり、若き時には年月を惜しみ、空しく老いを迎える事が無いようにと戒め、続く二句は河の堤坊に覆い茂る楊柳を見、登高して断腸の思いを抑えることを言う。『文選』巻二七に収録される魏文帝「燕歌行」に「群燕は辞し帰りて 雁は南に翔る、君が客遊を念ひて思い腸を断つ。慊慊として帰るを思ひ故郷を恋はん、何為れぞ淹留して佗方に寄る」(群燕辞歸雁南翔、念君客遊思斷腸。慊慊思歸戀故郷、何為淹留寄

佐方)とあり、これを踏まえれば、ここは異郷の地で故郷を思うであろう友の姿を想像して、友を見送る李端が断腸の思いを抱くということであろう。

さて、ここで問題となるのは第九句の「贈君折楊柳」である。冒頭句に「東城攀柳葉」とあることから、ここは折り取った楊柳の枝(葉)を旅立つ友に贈るということであろう。「顔色豈能久」とは、若いときには年月を惜しむべきだという戒めの言葉を受けて、若い時の短いことを言う。ここで折り取った楊柳を贈るのは、若き日の無為の旅をやめ、老い衰える前に早く帰っておいでと旅立つ者を引き留めようとする思いを込めたものと考えられる。

この李端「折楊柳」のように、中唐期の詩には、送別の場における折柳を詠む詩が現れるようになる。例えば、李端の従父で、大曆十才子の一人でもある李嘉祐の「送侍御使四叔帰朝」は、都長安に帰る人に楊柳の枝を贈って引き留めようとする詩である。

李嘉祐「送侍御使四叔帰朝」(卷二〇六)

淮南頻送別 淮南 送別 頻くして

臨水惜殘春 水に臨みて 殘春を惜しむ

攀折隋宮柳 隋宮の柳を攀折し

淹留秦地人 淹留す 秦地の人

含情歸上國 情を含みて 上國に帰り

論舊見平津 旧を論じて 平津を見ん

更接天津近 更に天津の近きに接すれば

餘花映綬新 餘花 綬に映えて新たならん

李嘉祐の生卒年は不詳だが、盛唐末の天寶七(七四八)年の進士であり、肅宗の至徳元(七五六)年に鄱陽令に左遷され、続いて乾元二(七五九)年に江陽令に量移、上元二(七六一)年には台州刺史に任じられている。後に大曆初めに都長安に帰るも、再び袁州刺史に任じられて江南に趣き、官を辞した後は蘇州に居住し、大曆末頃に亡くなったとされ、その活躍時期は盛唐末期から中唐初期に当たる。

この詩は江南から都長安に帰還する人を見送った時の作であり、第三句の「隋宮」は、隋の煬帝が楊州に建立した離宮、江都宮のこと。また「淹留秦地人」は、『文選』卷三三に収録される劉安「招隱士」の「猿狖群嘯して虎豹嘯ゆ、桂枝を攀援して聊か淹留す」(猿狖羣嘯兮虎豹嘯、攀援桂枝兮聊淹留)を踏まえれば、都に帰る人物(秦地人)が隋宮の楊柳を攀折して、この地を去りがたく立ちどまる姿を詠むのであろう。

そして、ここで注目したいのは、送別の場において楊柳の枝を折る人物が、見送る人物ではなく、旅立つ人物であるということである。これは、李嘉祐と活躍の時期が重なる独孤及の「官渡柳歌送李員外承恩往揚州觀省」においても、同じである。

独孤及「官渡柳歌 送李員外承恩往揚州觀省」(卷二四七)

君不見官渡河兩岸 君見すや 官渡 河の兩岸

三月楊柳枝 三月 楊柳の枝

千條萬條色 千条 万条の色

一一勝綠絲 一一 緑糸に勝る

花作鉛粉絮

花は鉛粉の絮と作り

葉成翠羽帳

葉は翠羽の帳と成る

此時送遠人

此の時 遠人を送り

悵望春水上

悵望す 春水の上

遠客折楊柳

遠客 楊柳を折り

依依兩含情

依依として両つながら情を含む

夾郎木蘭舟

郎を夾む 木蘭の舟

送郎千里行

郎を送る 千里の行

…

…

「官渡」は、魏の文帝が、かつて父武帝と共に袁紹と戦った時に柳を植え、その十五年後に再び彼の地を訪れた時に、柳がまだ残っていたことに感じて、柳の賦を作ったとされる場所で、柳の名所の一つとされる地である。前半はその官渡の河岸が春を迎える時期における離別を詠む。ここで第七句に「遠客折楊柳」とあるように、ここでも送別の場で楊柳の枝を手折っているのは遠く旅立つ人物である。続く第八句に「依依兩含情」とあり、旅立つ人物と見送る人物はともに惜別の思いを抱いており、楊柳を折る行為には、先の李嘉祐の詩と同じく、旅立つ人物の立ち去りがたい思いが託されている。

この送別の場面における「折柳」が、旅立つ者の行為であることは、「折柳贈別」の習俗を前提とすれば、奇異な行為に映るかもしれないが、そもそも男性の「折柳望郷」の淵源と考えられる梁鼓角横吹曲の「折楊柳歌辞五首」（既出）も、送別の場面で旅立つ者が

楊柳の枝を折るといふ設定であった。

折楊柳歌辞五曲 其一

上馬不捉鞭 馬に上りて 鞭を捉らず

反折楊柳枝 反て折る 楊柳の枝

蹀座吹長笛 蹀くも座るも 長笛を吹き

愁殺行客兒 愁殺す 行客の児

このように梁鼓角横吹曲の「折楊柳歌辞」に始まる「折柳望郷」の系譜に位置づけられれば、送別の場面における「折柳」が旅立つ者の行為として表現されることは、むしろ自然な展開と見ることができらるであらう。¹⁴

この他にも、戴叔倫の「堤上柳」（卷二七四）にも「垂柳 万条の糸、春来りて 別離を織る。行人 攀折の処、閨妾 断腸の時」（垂柳萬條絲、春來織別離。行人攀折處、閨妾斷腸時）とあり、旅ゆく人が楊柳を攀折し、閨怨の女性が断腸の思いを抱くと言う。この戴叔倫の例は送別の場ではなく、旅ゆく人物が旅の途中で楊柳の枝を折ることを詠むようであり、楊柳の「攀折」は故郷を思う旅人の行為ともされている。

そして、この旅立つ人物或いは旅ゆく人物の折柳にやや遅れて詩に用いられるのが、見送る者が楊柳を折って旅立つ人物に贈る「折柳贈別」である。先の李端「折楊柳」以外にも、劉禹錫「楊柳枝歌九首」其七に次のように見える。

劉禹錫「楊柳枝歌九首」其七（卷三六五）

御陌青門拂地垂 御陌 青門 地を払ひて垂る

千條金縷萬條絲 千條の金縷 万條の糸

如今綰作同心結 如今 綰まけて作なす 同心の結

將贈行人知不知 將に行人に贈らんとす 知るや知らずや

この詩は長安城東南の「青門」での別離を歌ったものであり、楊柳の枝を環にして旅立つ人に送るという当時の風俗を踏まえると考えられる詩である。結びの二句は、「同心の結」を作って楊柳の枝を贈る自分の心を、相手は分かってくれているのだろうかという思いを詠む。

この他に権徳輿「送陸太祝赴湖南幕同用送字」（卷三二四）にも「新知は柳を折りて贈り、旧侶は籃かごに乗りて送る」（新知折柳贈、舊侶乘籃送）とあり、新しい友人は折った楊柳を贈って見送り、古い友人はかごに乗って見送ってゆくと言う。ここで「折柳の贈」は比較的簡略な送礼とされていることも注目される。この他にも雍裕之には「折柳贈行人」（『全唐詩』卷四七一）という題の詩も見え、中唐期になって、送別の場に於ける「折柳贈別」が詩のモチーフとして用いられ始める。

以上のように、盛唐期以前の「折楊柳」が遠別離の男女の折柳を詠んで来たのに対して、中唐期には送別の場における折柳が詩に詠まれるようになる。そして、その送別の場における折柳は、旅立つ人物又は旅ゆく人物が立ち去りたい思いを込めて行う行為とする作例のほうが、比較的早くに現れ、見送る人物が旅立つ人物に贈る

「折柳贈別」はそれよりも遅かったようである。この旅立つ人物と見送る人物の先後は、更に詳細な検討が必要ではあるが、いずれにしても唐代の習俗として広く知られている「折柳贈別」は、詩の世界においては、中唐以降に現れた比較的新しいモチーフだったようである。

四 小結

本稿では、『樂府詩集』横吹曲辞二所載の「折楊柳」の作例を中心として、初唐期から中唐期に至るまでの「折楊柳」の展開をたどってきた。なお調査に遺漏があるかもしれないが、従来自明のようには説明されてきた「折柳贈別」の習俗は、盛唐期以前の詩にはいまだ広く用いられてはおらず、それは中唐期以降の詩に顕著に現れ始めるものであったことは示し得たであろう。もちろん、これは中唐以前に「折柳贈別」の習俗が存在しなかったことを意味するわけではない。そのような習俗が古くから存在していたことは否定できないが、詩の世界において「折柳贈別」が取りあげられるようになるのは、中唐期以降なのである。

この「折柳贈別」は中唐期にはいまだ多くの用例を見出すことができないが、晩唐期になると詩に広く用いられるようになる。本稿では、その例を挙げて示す余裕がないので、その変化を象徴するものとして、『樂府詩集』横吹曲辞二の「折楊柳」の末尾に挙げられる晩唐の翁綬「折楊柳」を最後に挙げておきたい。

翁綬「折楊柳」(卷六〇〇)

紫陌金堤映綺羅
遊人處處動離歌

紫陌 金堤 綺羅 映え
遊人 処処 離歌を動かす

陰移古戍迷芳草

陰は古戍に移りて 芳草に迷い

花帶殘陽落遠波

花は殘陽を帯びて 遠波に落つ

臺上少年吹白雪

台上の少年 白雪を吹き

樓中思婦斂青娥

樓中の思婦 青娥を斂む

殷勤攀折贈行客

殷勤 攀折 行客に贈る

此去關山雨雪多

此に關山に去れば雨雪多からん

この翁綬「折楊柳」は、閨怨の女性と辺境の男性とを対比的に描いた後に、結びの二句において、辺境に旅立つ人物に春を象徴する楊柳を折ってはなむけとすることを詠む。閨怨の女性と辺境の男性とを対比的に描くことは、初盛唐期の「折楊柳」にも見られた措辞だが、初盛唐期の「折楊柳」はそこから遠別離の悲哀を述べて結ばれていた。これに対して、この詩は送別の場における「折柳贈別」へと場面を転換し、旅立つ人物への惜別の思いを述べて結ばれている。このように楽府題「折楊柳」の主題も「折柳寄遠」から「折柳贈答」へと転換しているのである。

しかし、「折楊柳」又は楊柳を折る行為は「折柳贈別」に集約されていくわけではない。この時期は盛唐以前の「折柳寄遠」や「折柳望郷」も引き続き用いられており、また例えば唐代傳奇小説の「柳氏伝」に見える韓翃の「寄柳氏」(卷二四五)に「縦使ひ長条の旧に似て垂るるも、也た応に他人の手に攀折せらるべし」(縦使長

條似舊垂、也應攀折他人手)とあるように、楊柳が折られることを、美しい女性が誰かのものになってしまふことを表現する例も見える。更には『唐才子伝』卷七「雍陶」に引く情尽橋の説話のように、送別の場における折柳の行為を踏まえた逸話もあり、中晚唐期にはそれ以前に比べて、「折楊柳」はより多様且つ複雑な様相を見せ始める。

本稿では、この中晚唐期に於ける「折楊柳」の展開については論じることはできず、また唐代における送別という場の変容や、その場で制作された離別詩の展開との関連も考察するに至らなかった。¹⁵今回は「折楊柳」が「折柳寄遠」から「折柳贈別」へと展開する過程をたどることに終始してしまつたが、「離別」をめぐる問題との関連については、中晚唐期以降の「折楊柳」の展開と合わせて後考を期したい。

注

1 本稿に用いる唐詩のテキストには、『全唐詩』を用い、詩題の下にはその巻数のみを記した。

2 拙稿「梁陳の折楊柳——「攀折」の「折楊柳」」(『中國中世文學研究』六〇号・二〇一二)。なお「折柳贈別」の風習に言及する『三輔黃圖』の記事に対する疑義及び日本と中国に於ける「折楊柳」に関する諸説については、前稿を参照していただきたい。

3 沈佺期、劉憲、崔湜の「折楊柳」は以下のようなものである。
沈佺期「折楊柳」(卷九六)「玉窓 朝日に映え、羅帳 春風に吹かる。涙を拭ひて楊柳を攀るに、長条 腕がりにて地に垂る。白

花 飛びて歴乱し、黄鳥 思ひ 参差たり。妾自ら肝腸断たるも、傍人那ぞ知るを得ん」(玉窗朝日映、羅帳春風吹。拭淚攀楊柳、長條跪地垂。白花飛歷亂、黄鳥思参差。妾自肝腸断、傍人那得知)。

劉憲「折楊柳」(卷七一)「沙塞 三河の道、金閨 二月の春。碧煙 楊柳の色、紅粉 綺羅の人。露葉 暗臉を憐み、風花 舞巾を思はしむ。攀持するも 君は見ず、為に聴く 曲中の新たなるを」(沙塞三河道、金閨二月春。碧煙楊柳色、紅粉綺羅人。露葉憐暗臉、風花思舞巾。攀持君不見、爲聽曲中新)。

崔湜「折楊柳」(卷五四)「二月 風光半ばなるも、三辺 戊りて還らず。年華 妾自ら惜しみ、楊柳 君が為に攀る。落絮は衫袖に縈ひ、垂糸は髻鬢を払ふ。那ぞ堪へん 音信の断たれ、涕を流して 陽関を望むを」(二月風光半、三邊戊不還。年華妾自惜、楊柳爲君攀。落絮縈衫袖、垂條拂髻鬢。那堪音信斷、流涕望陽関)。

4「樂府詩集」横吹曲辞二には、韋承慶の後に歐陽瑾の「折楊柳」を挙げる。歐陽瑾は、「全唐詩」にもこの「折楊柳」一首が残されるのみで、その事跡は不明である。詩の内容は、閨怨の女性の「折楊柳」を詠んだものであり、また第四句には「辺思曲中来」と、韋承慶「折楊柳」にも見える辺境の兵士の「折柳望郷」のモチーフが見える。その内容は初唐期の「折楊柳」と大きく異なるものではないが、今回の考察からは除外した。

5「樂府詩集」横吹曲辞二には、初唐期の詩人の「折楊柳」として、もう一例、喬知之の「折楊柳」を挙げる。喬知之「折楊柳」は、

春の楊柳に己の容貌の盛衰を重ね、君主の寵愛がいずれ衰えることを愁える宮女の思いを詠み、初唐期の他の「折楊柳」がいずれも五言であるのに対して七言四句と形式も異なる。しかし、これは閨怨の女性から宮怨の女性へと設定を変えたものであり、「折柳寄遠」の一つのバリエーションと見て良いであろう。

喬知之「折楊柳」(卷八二)「憐むべし 濯濯たる春の楊柳、攀折將ち来たりて纖手に就く。妾が容 此と共に盛衰す、何ぞ必ずしも 君恩能く独り久しからん」(可憐濯濯春楊柳、攀折將來就纖手。妾容與此同盛衰、何必君恩能獨久)。

6「樂府詩集」は「余延寿」に作る。徐延寿は開元年間の処士、生卒年は不詳。

7張九齡「折楊柳」(卷四八)「纖纖 楊柳を折り、此を持ちて情人に寄す。一枝 何ぞ貴ぶに足らん、憐れむは是れ故園の春。遲景 那ぞ能く久しからん、芳菲 新に及ばず。更に征戍の客を愁ふ、容鬢 辺塵に老ふるならん」(纖纖折楊柳、持此寄情人。一枝何足貴、憐是故園春。遲景那能久、芳菲不及新。更愁征戍客、容鬢老邊塵)。

徐延寿「折楊柳」(卷二四)「大道 国門に連なり、東西 楊柳を種う。葳蕤 君見ず、嫋娜 垂れ来たること久し。枝に縁る 栖暝の禽、雄去りて 雌は独り吟く。餘花 春の尽くるを怨み、微月 秋陰に起こる。坐して望む 窓中の蝶、起ちて攀る 枝上の葉。好風 長条を吹き、婀娜 妾を何如せん。妾は見る 柳園の新たなるを、高樓 四五の春。胡塞の曲を吹く莫かれ、隴頭の人を愁殺せん」(大道連國門、東西種楊柳。葳蕤君不見、嫋娜垂

來久。綠枝栖暎禽、雄去雌獨吟。餘花怨春盡、微月起秋陰。坐望
窗中蝶、起攀枝上葉。好風吹長條、嫋娜何如妾。妾見柳園新、高
樓四五春。莫吹胡塞曲、愁殺隴頭人。

8 このような盛唐詩の中にあつて、李白「春夜洛城聞笛」が、副都
洛陽にいる人が春夜に「折楊柳」の曲を聴いて望郷の思いを抱く
としたのは、辺境兵士の望郷の曲であつた「折楊柳」のイメージ
を巧みに利用した新たな趣向の詩であつたと考えられる。

9 『全唐詩』卷一七七は、この詩を李白「送別」としても収録する。

『岑參集校注』（上海古籍出版社・二〇〇四）は、この詩を「文苑
采華」「唐百家詩選」がいずれも岑參の作とすること、また嚴羽
『滄浪詩話』考証に「太白詩『斗酒渭城邊、壚頭耐醉眠』、乃岑參
之詩誤入。」とあるを引く。

10 同氏『岑嘉州詩箋注』（中華書局・二〇〇四）「送楊子」の注に
「臨別折柳枝相贈、非真馬鞭也。《三輔黃圖》「灞橋在長安東、跨
水作橋、漢人送客至此橋、折柳贈別」（同書下卷六六九頁）とあ
る。『三輔黃圖』「灞橋折柳贈別」の記事が後人によって加筆され
た可能性があることについては、注2の拙稿を参照。なお劉開揚
『岑參詩集編年箋註』（巴蜀書社・一九九五）は「折柳贈別」には
触れず、この句は「春秋」文公十三年の「左伝」に見える繞朝策
の故事を踏まえると言う。『春秋』文公十三年の「左伝」に拠れ
ば、晋は当時秦に亡命していた士会が秦軍に用いられていること
を憂慮し、士会を晋に連れ戻そうと策略を設けて、士会を秦の使
者として晋に送り返させようとした。士会が秦を出立する時、晋
の策略に気づいていた秦の大夫の繞朝は、別れ際に士会に策（馬

鞭又は策書）を贈つて、「秦に人無しと思いなさるな」と忠告し
たと言う。この故事から後世「繞朝の策」は先見の謀略を意味す
るようになる。劉氏は、「臨岐贈馬鞭」が李白「送羽林陶將軍」
（卷一七六）の「臨行將贈繞朝鞭」と同じように「繞朝の策」を
踏まえると言うが、岑參の詩は、穎上の家族のもとに帰る人物を
見送る時の作であり、この句は「繞朝の策」の故事を踏まえたも
のではないであろう。

11 「贈遠」は、李白「代贈遠」（卷一八四）に「相思ひて寄する有ら
んと欲するも、君の見察せざらんことを恐る」（相思欲有寄、恐
君不見察、また顧況「贈遠」（卷二六七）に「暫く河辺に出て遠
道を思ひ、却て窓下に来りて新鶯を聴く」（暫出河邊思遠道、卻
來窗下聽新鶯）とあるように、遠く離別する人に贈ることを指
す。

12 張祜「折楊柳」（卷五一〇）「紅粉 青樓の曙、垂楊 仲月の春。
君を懐ひて攀折を重ぬるは、妾 腰身を妬むに非ず。舞帯 糸を
縈りて断たれ、嬌蛾 葉に向ひて嘯む。横吹 凡そ幾曲ぞ、独り
自ら最も人を愁へしむ」（紅粉青樓曙、垂楊仲月春。懷君重攀折、
非妾妒腰身。舞帶縈絲斷、嬌蛾向葉嘯。横吹凡幾曲、獨自最愁
人）。

13 独孤及は、天宝十三（七五四）年に洞曉女經科に合格し、代宗に
召されて左拾遺に任じられ、後に舒州刺史、常州刺史となった人
物であり、その活躍時期は李嘉祐と重なる。

14 例えば、楊巨源「折楊柳」（樂府詩集）卷二二未収。『全唐詩』
卷三三三の題下注に、一に「和練秀才楊柳」に作り、また一に戴

叔倫の作とするとある)に「水辺の楊柳 麴塵の糸、馬を立てて君を煩^{わづ}して、一枝を折る。惟だ春風の最も相惜しむ有り、殷勤更に手中に吹く」(水邊楊柳麴塵絲、立馬煩君折一枝。惟有春風最相惜、殷勤更向手中吹)とある。この第二句の「煩君」の解釈には諸説あって、いずれも「折柳贈別」を前提とするようだが(松浦知久編『統校注唐詩解釈辞典〔付〕歴代詩』(大修館書店・二〇〇一)楊巨源「折楊柳」「諸説の異同」の項(執筆担当…埋田重夫)を参照)、この詩も旅立つ人物に楊柳の枝を折り取らせることで、望郷の思いを抱かせ、彼を引き留めようとしたものと解釈できる。

15六朝から唐代に至る「離別」を主題とする詩の史的展開については、松原朗氏『中国離別詩の成立』(研文出版・二〇〇四)に詳しい。松原氏の提示する離別の様式と主題の形成過程は、「折楊柳」の展開とも深く関わる問題である。また氏に拠れば、離別という主題は、盛唐から中唐前期にかけて興隆したが、中唐後期以降は一転してその勢いを失い、相対的に衰退すると言う(同書「まえがき」vii頁参照)。「折楊柳」の変化も盛唐後期から中唐前期にあり、この点も今後考察すべき課題である。

(広島大学)